

## 歴史の語りとしてのフィクション：ヒロシマ・ナガサキの『アンダーグラウンド』とは

内田，友子  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494459>

---

出版情報：比較社会文化研究. 5, pp.13-20, 1999-03. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



## 歴史の語りとしてのフィクション

### ——ヒロシマ・ナガサキの『アンダーグラウンド』とは——

内田 友子

#### はじめに

「被爆体験を継承する」という問題は、戦後すぐにたちあげられたことは改めて言うまでもなく、その後たびたび繰り返し提起され、今日では少しも斬新なテーマではなくなっているといえるだろう。

しかしこの問題は、戦後の社会的な動向と呼応しつつ、歳月を経るほどにその内容が複雑化、重層化し、ときには派生を起し、現在では一元的に扱うことがもつとも難しくなった問題のひとつだといえる。そして「体験を継承する」ということである以上、「被爆体験」だけで論じてはいられない、ということもある。戦争にまつわる「体験」といえば、「従軍体験」「沖縄戦体験」など、今日まで数々の論争のキーワードとなってきたものが挙げられ、また昨今では「従軍慰安婦」の「体験」の証言が社会的にも注目を集めたことが記憶に新しい。

しかし単に論じられる場面が多様だ、ということがこの問題にともなう困難ではない。問題を難しくしているのは、今日私たちの問題意識が、「体験を語る」という行為の意味とは何か、という探究にまで達しているからではないだろうか。かつての問題意識、というより使命感

でうちたてられた「体験を継承しなければ」という意識から始まり、やがて「何を、なぜ継承しなければならぬか」という議論を重ねるうちに、私たちの問題意識は「どう継承するのか」という方法論めいたところへたどりついた。そしてそれに気付いたいま、その問題意識を生んだ土壌というものについて、考えなければならぬ段階に私たちは入ったといえる。

#### 一、「体験」と「継承」にまつわる問題

「原爆」を、実際に体験あるいは目撃した人は、かなり限られている。

しかし私たちは、それを歴史上の共有の「体験」として記憶している。その共有の体験とは、実際の体験者や目撃者の証言や報告を源として形成されてきたものである。半世紀以上たった今日でも学校の歴史の教科書に「原爆」のことが挙げられ、毎年八月に広島と長崎とで式典が行われるのは、そのさかのぼったところに「体験者」という存在があるからだ。そして逆に言えば、もしこれらの証言がまったく無ければ、私たちに「原爆」という共有の体験は形成されなかったのである。

しかし、教科書の記述や式典がくりかえされることで年表の上での「原爆」が風化しないのは確かだが、「体験を継承する」という問題のすべてをそこに回収することができないこともまた、明らかだ。実際の体験者によって形成された私たちの共有の体験を、今後「どう継承するか」。言い換えれば、体験者がまったくなくなってしまう将来に、共有の体験を「どう継承していくか」。年表の中だけでは解決できない問題である。それは、先に挙げたさまざまな場面の「体験」が、これまでたびたび議論される中でも、ひとつの焦点として意見を集めている問題だといえる。

「原爆」に関して近年目立っていることは、「体験」の語り方について、その行き詰まりの問題がさかんに報告されていることである。たとえば、「広島の子は、被爆の過去を言われ続けることに辟易している」<sup>(注1)</sup>とか、「伝え方がワンパターンだと拒否感を持たれる」<sup>(注2)</sup>、「被爆体験にもとづく核廃絶への説得力ある論理を再構築する必要がある」<sup>(注3)</sup>、「被爆地からの発言や運動が、一部にせよ、「押しつけ」に映るといふことは、心する必要もある」<sup>(注4)</sup>、「座り込む顔ぶれはほぼ同じ」、「マンネリ化は否めない」<sup>(注5)</sup>など要するに、現代における「継承」のありかたの危うさを訴え

ているといえるだろう。

同じような内容の記事は、たいいてい毎年各紙であるいはテレビでみることができる。もちろん、このように問題を繰り返し提起し、絶やさないとということ自体が、「原爆」に関する報道の目的だともいえる。

しかし、「どう継承するか」といういわば手段を模索することと並んで、考えなければならぬことがある。先に、問題意識を生んだ土壌について考えると述べたが、それは、なぜ手段を探さなければならなくなったのか、という問題である。さらに言えば、いわゆる共有の体験なるものを継承していく、その必然性が問われはじめたのはなぜか、という問題である。今日「体験の継承」に関する議論はかならずその点へ突き当たっているといえるだろう。共有の体験を形成した源だからといって、かつてのような、まずはじめに「体験者の証言」ありきという特権的位置付けは、「手段」を模索するにあたってすでに何の効力も持ちえない。

「小説トリッパー」で行われた上野千鶴子、川村湊、成田龍一による鼎談「戦争はどのように語られてきたか」では、まず成田が「戦争の語り」の変化について整理するところから始められる。一九四五年から現在までを三つの時期でわけ、次のようにまとめている。

#### 〈第一期〉一九四五～六〇年代後半

…被害者「われわれ」が、被害者「われわれ」へ、語る。

#### 〈第二期〉一九六〇年代後半以後

…加害者「われわれ」の意識と、あわせて反戦意識が加わる。

#### 〈第三期〉一九九〇年代

…何を「われわれ」と考えるのか、「語りの位置」を問題化。

さらに成田は、「これまでは体験が語られていた。いまは記憶が語られている。戦争の語りとは、記憶をどのようなかたちで表象するのかということなのです。」と述べ、「体験」と「記憶」とをはっきりと分ける。

成田のこの整理は、議論をこれから展開させていく上であらかじめ二つの前提をおこなっているといえる。ひとつは、上野千鶴子から指摘されているように、「語り」の世代の位相が変遷しているということ、つまり「われわれ」の担い手が交代しているということ。もうひとつは、現代の語り手「われわれ」から、「被害者」「加害者」という位置づけを排除して考えていこうということ。

「原爆」について「体験を語る」という場合、そこには常に「被害者」という位置付けがついてくる。「被爆体験」ということがばが新聞でもよく使われていることからわかるように、原「爆」を「被」った「体験」なのである。成田の整理は、この「被害者」あるいは「加害者」という位置づけを排除したところで、現代の「語り方」を考える必要があるということ提言している。

川村湊はこの成田の前提を踏まえた上で、「文学のひとつの方法として、文献実証主義的なものとは違うなんらかの別なやり方があるのではないか。」と、文学作品における実践を提起している。さらに沖縄戦を題材とした目取真俊の「水滴」については、「体験から切れた世代が記憶の伝承という別次元で発想した物語」だと評価している。

この川村の言う「別次元で発想」された作品については「原爆」を題材とした場合、どのような作品が近年描かれているのか。次に二つの作品を挙げた。いずれも戦後生まれの作家が「原爆」を扱った作品である。

## 二、ヒロシマ・ナガサキを「別次元で発想」する

はじめに、一九九三年六月号の「群像」で発表された足立浩二の「暗い森を抜けるための方法」をみてみよう。この作品の舞台は現在の広島市郊外、そこで暮らす元小学校教師の祖母をもつ大学生ナミの視点で描かれる。祖母のかつての教え子である、米田正吉という男が死亡したところから、作品は立ち上げられる。

米田は子供のころ些細なことから家出をした。その米田を、母は弟を背負って広島市まで探しにでかけたところで被爆、死亡した。そのことへの負い目から、米田は被爆体験がないにもかかわらず、自分は当日母や弟と一緒に被爆し、ひとり生き残った被爆者だと「嘘」をつき続けていた。隠し続けた事実を、恩師とその孫娘ナミに打ち明けた夜、偶然の事故から米田は平和記念公園で焼死する。

次の引用は、被爆者であることを「望んで」いた米田がそのことをナミに打ち明ける場面である。（傍線は内田による。以下同じ。）

私は自分から被爆体験を話し、嘘を本当にしようと懸命でした。どんな偶然が働いたのか、私の嘘は暴かれることがなかった。先生が被爆体験を作文にするように言われた時も、私は嘘を書いた、否もうその頃には嘘とも思っていなかったと思います。しかし母や弟と一緒に死にたかったというのは、本当にそう思っていたのです。

ナミさん、私はナミさんのお母さんを本当によくいじめました。その頃ミチさんは本当はピカドンにあったのだと噂されていましてね、私は自分が望んでもこんなに努力しなければ維持出来ないでいるも

のをミチさんが望みもしないのに手に入れたのが、羨ましく、そして憎かった。

「暗い森を…」は第三十六回群像新人賞の小説優秀作を受賞した作品なので、同年同号の「群像」にはあわせて「選評」も掲げられた。そこでは原爆を知らない世代の作者による「原爆」の取り扱い方に意見が集まっている。

「暗い森を抜けるための方法」は、原爆体験を〈嘘〉として扱ったところが面白い。それは被爆後およそ半世紀を経た現在のテーマといえる。広島市郊外の村の森は宅地造成のため消滅しようとしており、語り手の女子学生「私」は自然保護サークルに入って反対運動をしている。母親は大学教師で、東南アジアでの「日本軍の占領行為を研究発表」しているが、「ナミちゃん達の活動が自分の正義を信じて疑わなような聖域を作らないことを望むわ」と娘にいう。また祖母は「語ることが大事での、年寄が孫へ。そんな風にして伝承していく力に比べて、文字にしたものにどれ程の力があるのか」と語る。「暗い森」は、小説全体が、テーマも文体も、この種の正論的、啓蒙的であり過ぎた。

（後藤明生「正論的、啓蒙的、ナルシズム」）

「暗い森」は原爆を直接知らない若い世代が、原爆を題材としたもので、その意味で私は興味を持った。真摯に描く態度は快く、構成に苦心も見えるが、しかし、それがうまく行っているとは思えなかった。

（略）まるで原爆は事故と同じような外的与件で、使われている。しかし、原爆の小説はもつと主体的に内的に描かないと、成り立ちにくい。ここに出てくる森林保護の運動なども、外的な通念のかたちでし

歴史の語りとしてのフィクション（内田 友子）

かない。

（田久保英夫「現在の状況」）

（略）ヒロシマ被爆ということに個人的運命的な角度からかわってしまったという人間の設定には、やはりあれから随分時がたった若い世代の作品だという感慨を覚えた。が、その設定が被爆者の問題や、語り手の若い女子大生が関わっている環境問題など社会的ともいべきテーマと、どうもうまく響きあっていない。

（三木卓「マグマよ、噴け！」）

これらの選評から、この作品が「原爆」を〈嘘〉として扱ったこと、また、「若い世代」によって描かれたということが、注目された要因のひとつであることがわかる。裏をかえせば評価の視点は、これまでのいわゆる「原爆文学」と呼ばれる作品群の存在を踏まえた上での、この作品の特異性に注がれたと言える。それが必ずしも肯定的に評価されているわけでもなく、田久保は「まるで原爆は事故と同じような外的与件で使われている」と指摘している。

しかし、この作品では「原爆」が「事故と同じよう」に扱われている、むしろそれが主眼だといえるのではないだろうか。それがひいては被爆から半世紀近くたった日本での「原爆」の位置付けである、ということがこの作品では図らずも提出されているのであり、その描かれた位置付けの正当性を問うことは、川村のいう「別次元の発想」を拒むことではない。

次に挙げたのは、青来有「雪の聖地」（『文藝界』一九九七年六月号）である。青来にはこのほかにも「原爆」に限らず、長崎を舞台とする作品が多い。

「雪の聖地」は、直接「原爆」を扱った作品というわけ

ではない。短大を卒業し地元長崎の事務メーカーに勤める主人公菜穂子が、学生時代のあこがれの「せんせい」と三年前の同窓会で再会して以来、いわゆる不倫関係が続き妊娠する。認知はするが家庭を壊したくないという「せんせい」が菜穂子から離れていったことで、菜穂子は出産を決意する。一方で、養護学校高等部に通っていた頃から、朝の電車の停留所で乗り合わせる菜穂子に好意を示していたアキラは、自分がおなかの子の「おとうさん」になると言って、菜穂子に指輪を買ってくる。以上のようなあらすじだが、この作品中では、たびたび冬の「爆心地」の描写が繰り返される。

「菜穂子さんは、指輪をしなければなりません。みんながハタメイワクになってしまう」

その指輪は大きすぎた。指のつけ根あたりでくるくる回る。

「サイズ、なんて言ったの」

「おなかが出ているひとの指輪をお願いしました」菜穂子は高い声で笑った。おかしくて眼がにじんでいた。ゆっくりと世界の輪郭がおぼろげになった。果てしなく降りつづける雪のなかに、なだらかで、静かな、薄墨で描かれたような廃墟がひろがった。そこには破壊された天主堂があり、黒焦げのくすの太木があり、一本だけの支柱で奇跡的に建っている鳥居が見えた。すべて滅びきった後の無音の廃墟だった。

赤ん坊はしきりにざわざわとしている。産むからね、そんなに怒らないでね、と心の中でつぶやきながら、菜穂子はアキラの手を下腹に導いた。

先の「小説トリッパー」の鼎談のなかで川村湊は、沖縄では戦争についての噂話、怪談、ユーリー（幽霊）話

が存在するが、広島では似たようなものを見つけることができなかったと報告し、「広島ではまだ、そういう不謹慎さが許されていないのかな、と思いました。」と述べている。この作品では長崎の爆心地が舞台とされながらも、主題は私生児を産む一人の女性の姿にあり、さらに被爆者は爆心地の幻影として、菜穂子の心理状態の展開と呼応するかたちでユーモラスに描かれている。

「雪の中に影が見える？」と菜穂子は黙りこんでしまったアキラに再び訊ねた。

「ああ、見えます」とアキラは答え、それからまったく思いがけない不思議な爆心地の幻影を語った。「でも、もううずくまっていけません。雪を食べています、ぼわんぼわんと跳ねて、みんなで金魚のように雪を食べています」

ふいに濃密に彼らの気配が背中の方から押し寄せてきた。「渴く」と言いながら死んでいったおびただしい数のひとびとが、雪の中でようやくのびやかに背伸びをして起き上がる。足音もなく、いつせいにいびつなアドバルーンのように跳ねながら、舞い降りてくる雪を食べ、喉の渇きを癒している。

やがて死者たちの気配は、かすかな悲哀と寂しさを残して、体温で融ける雪の結晶のように背後で消えていった。

この作品について、青来自身は川村との対談<sup>注6</sup>で次のように述べている。

誤解されるかもしれませんが、小説の中で原爆の悲惨さを訴えたいとか、キリシタン迫害の歴史を追及したい気持ちとは、とくに強くないんです。むしろ長崎という土地が持たされている既成のイメージ

や物語をひっくり返してみたいという気持ちが強い。最新作の「雪の聖地」で、冬の爆心地を舞台に設定したのも、その思いからなんです。夏の爆心地の様子は、毎年八月九日が近くなるとニュースでも流れ、慰霊や鎮魂、あるいは反戦平和の希求といった一般的なイメージも出来上がっていますが、冬になると爆心地には誰も訪ねてこないし、目も向けない。すごい寂寥感と静寂があるんです。そういう場所を書くことで爆心地の別のイメージを伝えたかったことと、雪の降る原子野に、新しい生命を宿しながらも苦悩せざるを得ない女性を立たせ、いったんはすべてが焼きつくされ、滅んでしまった爆心地で子供を産むことの意味を問うてみたかったです。

さらに前掲した引用場面を、川村の指摘に対して次のように解説している。

あれは、原爆で死んだ人たちのつらく陰惨なイメージを逆転させたかったんです。被爆者たちが身も蓋もない無惨な死体となって転がっている原子野の記憶はとてもつらいものです。そのイメージの世界で、ある種のユーモアによって死者たちを甦らせたいと考えて、あれを書きました。

この青来の発言からもわかるように、「雪の聖地」は長崎という土地の持つ既成のイメージを逆転させるという目的をもつ作品であると同時に、言い換えれば、「夏の爆心地」という、長崎において形成されたイメージの意味を、現代において問い直した上でそれを壊していく姿勢をとった作品だということもできるだろう。

以上、「原爆」を題材とした作品を二つみてみたが、これらはいずれも、「原爆」、さらにいえば、ヒロシマ・ナガ

サキが作品の主眼ではない。「暗い森……」では被爆体験を「嘘」としてでも得たい男が描かれ、「雪の聖地」では被爆者は亡霊としてユーモラスに扱われる。これらの作品を論じるとき、もし「体験の語り」あるいは「被害者」「加害者」という視点が持ち込まれてしまった場合、その議論はまったく停滞するか、もしくはいきなり畑違いの方向へ進んで水掛け論に陥ってしまうことは容易に想像できるだろう。

しかし、この作品たちをフィクションだからといって、「別次元の発想」だからといって机上にのせておくだけでいいのだろうか。

なぜこのような発想を持つ作品が生まれたのか。何がこれらのフィクションをつくらせたのか。考えなければならぬのは、これらの作品が存在する理由である。

### 三、村上春樹『アンダーグラウンド』での試み

一九九五年三月二十日の朝、通勤時間の都心で地下鉄サリン事件は起こった。謎めいた事件と、そこにオウム真理教という宗教団体の動きがからんだことで、新聞やテレビ等では連日報道が繰り返され、一時は日本中が騒然としていたような印象をそれから与えられたことは記憶に新しい。その事件からちょうど二年後の一九九七年三月に村上春樹の『アンダーグラウンド』（講談社）が刊行された。小説家である村上春樹がサリン被害者のインタビュー集、つまりノンフィクションに挑んだという大々的な宣伝も手伝って、発表後、文芸雑誌や総合雑誌では『アンダーグラウンド』を読む」といった書評がいくつか集まり、さまざまな意見が論じられた。それらを概観すると、まず論者たちが注目したのは村上春樹がくどいまでに「はじめに」で説明しているインタビューの手法である。

（略）この本に収められた人々の証言は、完全に自発的であり、前向きなものである。そこには文藝的装飾もなければ、誘導もなく、やらせもない。私の文章力は（もしそういうものがいくらかでもあるとすればだが）、「人々の語った言葉をありのままのかたちで使って、それでいていかに読みやすくするか」という一点のみに集中された。

（二四六）

村上は、この手法をとったのは「被害者」一人ひとりの顔たちの細部を少しでも明確にありありと浮かびあがらせたかった」からだといひ、その理由を次のように述べる。マスコミの細部におよぶ取材により「加害者」オウム関係者のプロフィールが「一種魅惑的な情報や物語」として報じられたのに対して、「被害者」一般市民「のそれは、まるでとってつけたみたいだった」、さらに「パターン化された文脈上でしか語られなかった」。

おそらくそれは一般マスコミの文脈が、被害者たちを「傷つけられたイノセントな一般市民」というイメージできつちりと固定してしまいたかったからだろう。もつとつとこで言うなら、被害者たちにリアルな顔がない方が、文脈の展開は楽になるわけだ。そして「（顔のない）健全な市民」対「顔のある悪党たち」という古典的な対比によって、絵はずいぶん作りやすくなる。

私はできることなら、その固定された図式を外したいと思つた。

（二六六）

この「固定された図式を外」すということはどういうことなのか。

歴史の語りとしてのフィクション（内田 友子）

それは六十人の証言を挟んで、あとがき的に書かれている「目じるしのない悪夢」でさらに具体的に解説されるが、その前に、実際その手法で得た「証言」とはどのようなものかみておきたい。この『アンダー……』の手法がどんな成果、あるいは失敗をもたらしているか、という分析が多くの論者によって各々展開された。いわゆる「ノンフィクション作家」を職業とする立場からは批判的な意見が多く出ている。たとえば、村上の方法は被害者の傷口の痛みを刺激しないような距離をとつてしまい、良質の証言をキャッチしていながらのほんとその場を素通りする「殿様フィクション」<sup>（注9）</sup>だとか、書くことを力を十二分に知り抜いている村上にもかかわらずその方法論が「過剰防衛気味」<sup>（注10）</sup>、なかには「ノンフィクションというものをほとんどわかっていない」という説教めいたものまでみられた。

しかし、これらの「ノンフィクション作家」たちの批判は、先の「固定された図式を外したい」という村上の主張と意図を見逃している。

サリン被害者の証言はそれぞれ、村上が心がけたとおり各人の生い立ちや育った環境、趣味や職業といった、事件とは無関係な「個人的な背景」からたちあげられている。事件に関しては、もちろん同じ現場や状況に居合わせた人々の記憶なので、読みすすめるうちに反復される内容も多くなる。「読み物」として見た場合、正直なところ途中で読み手は退屈するかもしれない。しかし、「はじめに」でのことわりがきを念頭におくと、この言つてみれば無修正的なバランスの悪さが、むしろ村上の作為だということがわかる。

それは、この六十人の証言を通読した時、ある座りの悪い印象が残されることで、よりいっそう明確になる。印象というより不可解さ、といった方がもっと適切かもしれない。

#### 四、「固定された図式」と怒らない「被害者」

証言のほとんどに、このような事件を起こしたオウム信者への怒りが述べられていた。「そんなことをするやつらは、極刑にしてほしい。」（二八一頁）、「麻原はね、早いところ裁判すませて死刑になった方がいいよ。」（四三五頁）など、これらはある意味で、私たち読者が容易に予想し得た発言だといえる。

しかしその一方で、証言のなかに、オウム信者や事件に対して怒りを覚えないことば、のみならずオウム信者たちへの共鳴を語っているものが少なからずあった。つまりそれらの証言は、当時、連日事件の報道にさらされていた私たちのなかで自然と形成されていた「サリン被害者」像を、明らかに裏切るものであったからだ。

（略）僕の場合、同じ電車に乗り合わせて被害にあつた他の人の感じ方とは、ちよつと違うかもしれない。（略）個人的な怒りというのはそんなにありません。それから、こんなことを言うとき変だけれど、ああいう宗教、狂信的なもののことを理解できないでもないというのは、昔から気持ちとしてあるんです。頭から否定する考え方は持っていない。

（井筒光輝）九九頁

犯人の個人個人については、とくに怒りというのは感じません。あの人たちも組織の中で踊らされていたんだという風に思います。テレビなんかで麻原の顔を見ても、憎たらしいという気持ちはなぜかあまり湧いてこないんです。

（坂田功一）一八四頁

人間って弱いですから、どうしても頼れるものが必要なんです。そんなときにばつと答えを与えられると楽でいい。

会社なんかでも判断に迷っているときに、上から「こうやれ」つていわれれば、それは楽なんです。何かあっても、それは上の人の責任になりますから。自分は責任を逃れることができる。とくに私なんかの世代には、そんな世代的な特徴があるかなって思っています。だから彼ら信者がマインドコントロールされるという感覚も、わからないではないですよ。

〔片山博視〕四二四頁

〔略〕韓国語にこんな言葉があるんです。(略)つまり殴られた人は痛いけれど、本当に心が痛むのは殴った人の方だということですね。もちろん重症に苦しんでおられる方にこんなことを言ったら怒られるでしょう。それぞれに立場や考え方がありますからね。でも誤解を恐れずに言うなら、それが今の私の実感です。しばらくは「この野郎」と思っていたが、今ではいろんなことをもう少し客観的に見られるようになりました。

〔石原孝〕五三一―五三二頁

この他にもオウムに「怒り」を感じないという証言がいくつみられ、それぞれにその理由が述べられている。ここでは、比較的オウム信者に対して「わからないでもない」という感想を持つものを挙げたが、中には、同じく怒りは感じないしながらも、「同じ地平には立てないというか、彼らは違う次元の人たちなんだ……そう思うと、烈しい怒りも少しは収まってきました」(「中山郁子」二五三頁)、「彼らに対して同じ人間だという基準をあてはめるのが間違い」(「平中淳」三六七頁)、「理解できない

から憎しみの実感が湧いてこない」(「早見利光」五四四頁)というように、前掲の証言者たちとは完全な対極にたっているといえるものもあった。

興味深いのは、次のような気遣い(?)をみせる証言者もみられることだ。

しかし犯人に対しては、とくに個人的な恨みつらみというほどのものではありません。何か事故に遭ってしまった、という程度のことです済んでしまっていますね。こういう答えはあまり期待されていないんじゃないかと思うんですが。

〔園秀樹〕一一五頁

これに対して村上は「いや、とくに何かを期待しているわけでもないんです。べつに典型というのがあるわけではありませんから。」と応じている。

もちろんこのような証言は、事件への関わりかたの度合い、自分が実際に被ったリスクの度合いによつて語調が変わってくるものだとしても、私たちの予想、もつと露骨に言えば、『アンダー……』を手にした読者の「期待」に背くものであったことは、確かである。

そして「とくに何かを期待しているわけでもない」と言いながらも村上がある意味で「期待」していたものは、むしろこれら予想外のことをサリン事件体験者(被害者)ではなく、から引き出すことではなかっただろうか。これらの証言の後、「目じるしのない悪夢」では、この「ノンフィクション」が次のように解説される。

余計な装飾物さえ取り払ってしまえば、マスメディアの依つて立つ原理の構造はかなりシンプルなものだったと言える。彼らにとって地下鉄サリン事件とは要するに、正義と悪、正気と狂気、健常と奇形

の、明白な対立だった。(略)つまり、麻原彰晃やオウム真理教者に比べてみれば、また彼らがなした行為に比べれば、世間の圧倒的多数の間違った「正義」であり「正気」であり「健常」だった、ということだ。これくらいわかりやすいコンセンサス(意見一致)はない。マスメディアはこぞつてこのコンセンサスの流れに乗り、その勢いをますます加速させた。

(六八八―六八九頁)

つまりこれは、村上が「はじめに」で述べた、「固定された図式」のことを指す。そしてその対立の「図式」は、先にあげた「期待されていない」証言によつてバランスを崩し、あるいは対象を「理解できない」と黙殺する証言によつて、「対立」することさえ放棄された。

事件発生後しばらく経過したところから、私は漠然とではあるがこういう考えを抱くようになっていた。この地下鉄サリン事件の実相を理解するためには、事件をひきおこした「あちら側」の論理とシステムを徹底的に追究し分析するだけでは足りないのではない。もちろんそれは大事で有益なことだが、それと同じ作業を、同時に「こちら側」の論理とシステムに対しても並行して行っていくことが必要なのではあるまいか、と。「あちら側」が突き出してきた謎を解明するための鍵は(あるいは鍵の一部は)、ひょっとして「こちら側」のエリアの地面の下に隠されているのではあるまいか?

(六九二頁)

その「こちら側」のエリアの地面の下に隠されているものについて、さらに村上「ある意味では、我々が直

視することを避け、意識的に、あるいは無意識的に現実というフェイズから排除し続けている、自分自身の内なる影の部分（アンダーグラウンド）」だと説明する。

もちろんこれが、「怒りを感じない」証言者たちはひとつとするとオウム信者になり得るかもしれない、などという短絡的な発想でないことは明白だ。むしろ、その中のひとつである次の証言者のことばが村上の考察を促しているのではないだろうか。ちなみに、この証言を行った豊田利明は当時千代田線の当務助役で、事件当日、霞が関ホームでこぼれたサリンの清掃処理にあたり、その際「一緒に釜の飯を食べてきた」同僚二名が死亡している。

彼ら（オウム―注内田）を憎んだところで、そんなもの何の役にも立ちません。（略）オウムみたいな人間たちが出てこざるを得なかった社会風土というものを、私は既に知っていたからです。日々の勤務でお客さまと接しているうちに、それくらいは自然にわかります。

（八二頁）

この事件が、一時的に世間を騒がせた奇異な事件のひとつとして、人々の記憶からいざれ薄れていくことは避けられない。その後も日本では、「世間を騒がせる奇異な事件」と呼べる出来事は次々と起こっているからだ。

しかし村上が『アンダー…』で試みたことは、事件そのものを「伝承」することでも、共有の記憶を築き上げることでもない。もちろん、これほど注目を集めた証言集であるから、結果としてその役割を担うことにもなり得るだろうが、村上が追究しようとしているのは、その「奇異な事件」をひきおこした土壌である。オウムという宗教団体はもちろんだが、マスコミが作りだす安直な二

項対立やそれに安易に乗じる人間はなぜ、どこから生じるものなのか。『アンダー…』はそれを、「体験を語る／聞く」行為を使って説明させようと試みられたものである。では、「こちら側」のエリアの地面の下に隠されている」ものとは、何か。

それについて村上は、『アンダー…』の段階で結論を明確に導きだすことはできなかったが、今度はオウム真理教の信者たちにインタビューした『約束された場所』（一九九八年十一月、文藝春秋）の刊行にともなって、「サリン事件の意味は長い時間をかけ、突き詰めなくては」と述べ、次のようなコメントを出している。

「戦後の日本は高度成長に支えられ、一生懸命働くほど平和で豊かにうまくいくと信じられた。しかし結局それはうそっぱちで、ただのフィクション（物語）と分かってしまう。以前の価値観が失われたところに現われたのが、オウムという新しい物語で、現実との接点を捨てた若者がそこにスポツと入ってしまった」

（沖縄タイムス）一九九八年十二月二十二日）

### おわりに

以上、村上春樹の『アンダー…』をみてきたが、これは、今後はヒロシマ・ナガサキの「語り方」も『アンダー…』と同じ方法論で行うべきだ、などと突拍子もないことを口走るためのものでは、もちろん、ない。昭和二十年の「原爆」と、平成七年に起こった地下鉄サリン事件は、むしろ何もかもがまったく別の次元で論じられる問題だといえる。

ただ留意しておきたいのは、そこに「被害者」あるいは「加害者」という位置付けが存在する問題、ということ

とにおいて、村上が地下鉄サリン事件にとりくむときの問題設定の視点と、「一」で示したような、歴史（体験・記憶）の語り方に関する問題を考察する場合の視点とは、ある共通性を持つといえるのではないか、ということだ。つまり、事件発生から二年もたたないうちに「固定された図式」を取り払おうとした村上の試みは、他方で歴史の語りに関する議論が半世紀かけてたどりついたところと、もちろん扱う対象は異なるが、同じ位置にいるといえる。「固定された図式」が何を生み、また何を隠してしまうのか。そこからまず問うていくという視点である。

先にあげた「小説トリッパー」の鼎談で、上野千鶴子に次のような発言がある。

記憶の風化の裏側にあるのは、当事者の特権性が失われてゆくことなんですね。「被害者」われわれの構築は、「体験者」われわれの構築でもあって、「体験者」われわれ」と「聞き手のあなた方」の境界の定義をする役割をしちゃうんです。当事者の特権性の剝奪は、逆にすべての人を現場に巻き込むことを意味する。あなたの責任を免罪しない、聞き手の責任を免罪しないことと同じであるはずです。

これを上野は「記憶についての新しい合意形成の契機」として、記憶は「あくまで現在における語り手と聞き手との間の関係の再構築」であると結論づける。

例えば、「四」であげた証言のケースで考えてみる。この証言の中には、単純にいうと、いわゆる事件の「体験者」らしからぬ発言がある。彼らは、たとえば「麻原は死刑だ！」と誰よりも声高に叫ぶ「特権性」を持つていながら、それを行使したがない。この時「特権性」に期待を寄せる読者が「座りの悪い」印象を持つのは、そのせいで事件をめぐる善悪の二項対立の図式が不明瞭に

なるからである。つまり「あちら側」と「こちら側」との間の境界線を見失うからである。

また別の場所では上野は、「たったひとつのわたし」を立てるかわりに、「さまざまなわたしたち」を承認していくことは、多様なわたしたちが生きていける社会の可能性につながる」と述べ、多様な、時には反動的な言説が生まれることをついに阻止できなかった歴史そのものに目をむけ、「絶対」（この場合は「特権性」と言い換えられるだろう）を求める言説をもその多様な選択肢のなかに解消していく「多元主義」を提唱している<sup>〔注1〕</sup>。

「原爆」について、その体験の継承をめぐる問題はこれからも新聞などでとりあげられ、語り部たちの活動が直面している危機が議論されるだろう。そのとき、他国の核実験実施に対して「ヒロシマ、ナガサキの体験を基に、核兵器のむごさを伝えるしか」ないという主張が根付いている土壌と、一方で「暗い森をぬけるための方法」や「雪の聖地」など、「体験から切れた世代」が「別次元で発想した物語」（川村）をうみだしている土壌とを、字面どおり「別」ものとして捉えていいだろうか。

現在さまざまな場面で議論されている「歴史を語る」「体験を語る」という問題について、その議論に加わる前に、自らの発言の立脚点を明確にしたいというのが本稿の目的であった。その上で、ヒロシマ・ナガサキがフィクションとして語られるとき、たしかに「体験・記憶の継承」としては「別次元」ながらも、それらが現に書かれ存在している理由を追究したいからだ。なぜ共有の体験なるものを継承しなければならないのか、その必然性は何か、なぜ方法が模索されているのか、「マンネリ化」という現象を「阻止できなかった歴史そのもの」（上野）とは何か。これらの複雑で重層的で、一見「別」ものに見えるような問題たちに対して、歴史の語りとしてのフィクションの存在は、何らかの解答を与えていくのではないだろうか。

いだろうか。

## 注記

- 〔1〕「平和教育に求められるもの（上）」（沖縄タイムス）一九九七年八月十三日
- 〔2〕「ボクとワタシの見た戦争（下）／田辺聖子・妹尾河童特別対談」（沖縄タイムス）一九九七年八月十七日
- 〔3〕「社説」（中国新聞）一九九八年五月三十日
- 〔4〕「揺れる被爆地ナガサキ」（西日本新聞）一九九八年八月二日
- 〔5〕鼎談／上野千鶴子・川村湊・成田龍一「戦争はどのように語られてきたか」（週刊朝日別冊 小説トリッパー）一九九八年夏季号
- 〔6〕対談／青来有一・川村湊「大江健三郎と横溝正史」（文学界）一九九七年七月号
- 〔7〕『アンダー……』に関する意見のなから、本稿で参考にしたものを挙げる。
  - ・野田正彰「隠された動機」（群像）一九九七年五月号
  - ・風丸良彦「乗り合うことへの欲望を捨てて」（群像）同前
  - ・吉本隆明「どちら側でもない」（群像）一九九七年六月号
  - ・渡部直己「チャリティー風土の陥穽」（群像）同前
  - ・河合隼雄「村上春樹『アンダーグラウンド』を読む／地下鉄サリン事件が教えること」（世界）一九九七年六月号
  - ・井上順孝「アンダーグラウンドの出口」（國文學）一九九八年二月臨時増刊号
- 〔8〕吉田司「オウムはわが友」（文学界）一九九七年六月号／特別企画「ノンフィクション作家五人が村上春樹『アンダーグラウンド』を読む」
- 〔9〕井田真木子「村上氏の方法論」（文学界）同前
- 〔10〕佐野眞一「ノンフィクションの切実な課題」（文学界）同前
- 〔11〕上野千鶴子「多様な私たち」（沖縄タイムス）一九九八年十二月三十日
- 〔12〕「核のない世界へ」（中国新聞）一九九八年六月十二日